

# 第54回 切々と訴えかけるバリトンの響きで掴んだ「女心」

東京五輪が終了した2か月後の昭和39年12月、童謡歌手出身の二宮ゆき子が『まつのみ小唄』を発表。B面には『ウルトラCでやりましょう』という曲が収録されていました。

この大会で、男子体操を除き団体競技金メダルを獲得したのは女子バレーボールだけだったこともあり、女子バレーの決勝戦が東京五輪の白眉と言っているでしょう。私たちはリアルタイムのテレビ放送に釘付けになり、翌年の記録映画『東京オリンピック』で涙の名シーンを再確認することになりました。

女子バレーの中心メンバーだったニチボー貝塚の選手たちに「東洋の魔女」の異名が冠せられ、新聞の見出しにも大きく掲載されるようになった昭和37年6月、歌謡界に袴をはいて「男心」を歌う女性歌手が登場します。「恋は神代の昔から」でデビューを飾った島山みどりです。島山は同年発売の『出世街道』でも「俺はあの娘の涙がっらい」と歌い、「東洋の魔女」と共に男勝りの女性を印

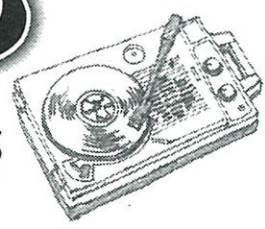
象づけました。

前述の二宮ゆき子は、『まつのみ小唄』の翌年に『男心の唄』を発売

## 名曲カルテ

# 昭和歌謡と いままで

堀井六郎  
絵・松本浦



しますが、ほとんど知られることはありませんでした。二宮に「男心」を歌わせたのは、同じキングレコードから前年発売されたバーブ佐竹の『女心の唄』の爆発的大ヒットにあやかった戦略でした。

バーブ佐竹の『女心の唄』は『まつのみ小唄』と同時期の昭和39年12月に発売され、熱唱することなくバリトンの響きで切々と訴えかけるバップの歌声は、男性歌手に「女心」を歌いかけられることに不慣れだった女性たちの胸に浸透、まさに女心を掴んだのです。

昭和35年に美男美声の井上ひろしが『雨に咲く花』で「女言葉の歌詞」を歌って大ヒットさせていますが、



バーブ佐竹の『女心の唄』の少し前にも、大下八郎が『おんなの宿』をリリース、島山みどりとは対極をなし、男性歌手が女性言葉で女心をやさしく歌うという、新たな流れを生み出しています。

二宮の『まつのみ小唄』は、少し遅れて発売された三島敏夫の『松の木小唄』と競作になり（歌詞が異なります。ただし、女性言葉は共通）、相乗効果で三島盤もヒット、三島の人気が全国的なものとなりました。その後、バーブと三島は「女心」を歌う代表的な男性歌手として人気を定着、同列系統の島和彦、美川憲一、森進一といった若手美男歌手や菅原洋一などに影響を与え、やがて、ムードコーラス・グループの大半が「女心を歌う男たち」という様式を形成、昭和歌謡の大きな魅力を誕生させる原動力になります。

バーブと三島にはハワイアン・グループ出身という共通項がありました。彼らに共通するのは力を込めて歌わない「クルーナ」と呼ばれる唱法です。同じハワイアン出身のマヒナスターズにしても同様で、彼らが女性歌手と共演しても違和感が少ないのは、そんな背景があったからかもしれません。

ほりい・ろくろ 昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。「私の『昭和歌謡考』第4集「あわせになるうね」(グスコ出版)が好評発売中